

滋賀県文化情報

『えんむすび』

●「近美×びわ博

描かれた湖国の生き物と風景」展

滋賀県立近代美術館は現在、新たな美術館の整備に向け休館中ですが、その期間を利用して、県内の施設で館藏品などを紹介する「県立近代美術館県内移動展示事業」を実施しています。

本展では、滋賀ならではの風景や生き物、風俗、文化を描いた絵画作品約40点をセレクトし、琵琶湖博物館所蔵の資料とともに紹介します。美術史的な視点だけでなく、自然科学や歴史学といったこれまでにない視点からもご鑑賞頂けます。会期中に多彩なワークショップや講演会も開催します。

同じ作品でも、見方が変わると新しい発見が！

初めての「近美」と「びわ博」のコラボレーション企画展示、ぜひお楽しみください。

平成30年4月28日（土）～平成30年6月3日（日）

月曜休館、ただし4月30日（月・祝）は開館
滋賀県立琵琶湖博物館企画展示室
問い合わせ先…滋賀県立近代美術館
077-522-2111

●「美の滋賀」探訪ツアー

滋賀県では「美の滋賀」の拠点・入り口となる美術館（新生美術館）の実現を目指して滋賀ならではの多彩な美を体感できるモニターツアー「『美の滋賀』探訪ツアー」を行っています。その中から、平成30年1月27日に行われた「滋賀の建築・今昔の美を感じる一日旅」の様子をお伝えします。（県民生活部文化振興課 安部茜湖）

JR大津駅に集合後、建築士の柴山直子さんの解説で大津市内を散策し、二階にある小窓が印象的な小川家住宅（国の登録有形文化財）や、台所の大きな「おくどさん」と今もなお現役で存在感が圧倒的な井戸が印象的な「まちづくり大津百町館」を訪問。

その後、守山市のセトレマリーナびわ湖でガラス一面に琵琶湖のきらめきを映すチャペルなどを見学して近江八幡市へ移動し、八幡伝統的建造物群保存地区にあるポードレス・ミュージアムNOMAを訪れ

て展示作品を鑑賞、さらに県指定有形文化財のウォー

リズ記念館やラコリーナ近江八幡を見学しました。建物一つひとつが持つ温かみのある「ストーリー」に触れることで、

普段何気なく通り過ぎる町並みの中に、そこで暮らす人びとの息づかいを感じるような新しい気付きがありました。

あいにくの雪空でしたが、参加者は「身近にこんな魅力的な建物があったなんて。自分の町を再発見する良い機会だった」と思い思い印象に残る場面をカメラに収め、ツアーを堪能していました。

平成30年度も県では「美の滋賀」を身近に感じていただける企画を予定しております。ご期待ください。

問合せ先…滋賀県県民生活部文化振興課

新生美術館整備室

077-528-3346



Made in Shiga

「身近に感じる「美」の世界

●映像を未来につなぐ

～おうみ映像ラボについて～

おうみ映像ラボ代表 長岡 野亜

広報 大藤 寛子

2014年から、滋賀で撮影された映像を通じて、地域に引き継がれた技術や知恵、共同体の姿など「暮らしの周縁」にあるものの価値を再認識する活動を行っています。資料館や博物館、教育委員会などで

近年に実施された「暮らしアート事業」の中から地域を元気にする主な取り組みを紹介いたします。

加者の記憶や言葉を参加者全員で共有する場となっています。

参加者を募り、撮影地を訪問する「遠足」も企画しています。映像に取り上げられた地域を体感するのが目的です。これまでに「映画『ワキノタン』の撮影地・高島市朽木針畑を訪ねて」「甲賀の木挽に会いに行こう」「東海道五十三次・水口宿々甞る水口細工&春を呼ぶ水口囃子」などを実施しました。滋賀には地域ごとに人が育む文化があり、私たちメンバーもこれらの場を通じて教えてもらうことばかりです。



所蔵されている映像や、昭和初期から昭和50年代頃までに一般家庭で撮影された8ミリフィルムなどの上映会は、映像にかかわるゲストや関係者から貴重なお話を聞くと共に、映像から呼び起こされた参

8ミリフィルムの映像上映会は、能登川博物館（東近江市）や彦根の「七曲がりフェスタ」、大津市歴史博物館や介護施設で開催しました。介護施設の場合は、1970年代に近隣で行われた夏の盆踊りの映像が流れると「ああ、この人、〇〇さんやわあ」「この道、商店街のあそこやな」と話

「と、みなさんが映像を食い入るように見守ってくれます。また、施設利用者の方々が働き盛りであった若かりし頃の映像を若い職員さんたちと「一緒に見る」ことでいつもと違う交流が生まれたようです。

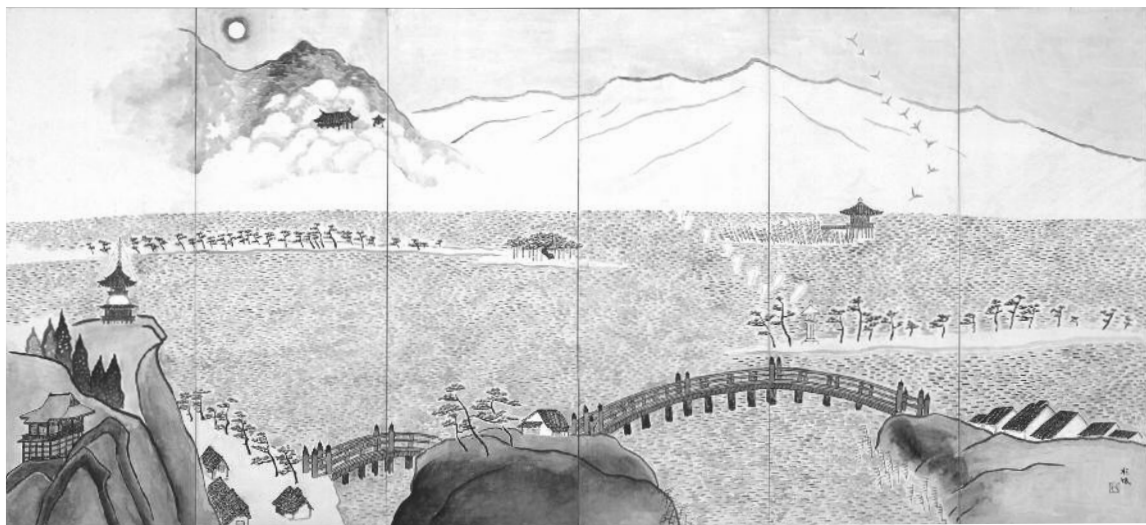


8ミリなどのフィルムは経年劣化や映写機の生産中止などで、気軽に映像を見ることが出来なくなっています。フィルムを修復する会社もありますので、処分される前にご連絡いただければと思います。

2018年2月、「文化・経済フォーラム滋賀」様より、「文化で滋賀を元気に！賞」の「映像を未来につなぐ文化賞」を受賞しました。関わって頂いた皆さんの方々のお蔭です。今後も映像を気軽に活用でき、地域のさまざまな姿、お一人お一人の記憶や思いを共有するような機会が増えていくことを願っています。

アートのみかた

— 滋賀県立近代美術館所蔵作品をもとに —



茨木杉風「近江八景図」六曲一隻 紙本着色 昭和51年（1976） 157.6×345.0cm 滋賀県立近代美術館所蔵

● 近江八景、自由奔放

滋賀県立近代美術館主任学芸員 山口 真有香

どこかほのぼのとした水辺の風景です。画面の中央から下の部分にかけて墨の点々をつなげたような水面が横長に広がり、その周囲には、曲線を描く茶色の橋（瀬田唐橋）、水面に浮かぶお堂（堅田の浮御堂）、左手上方の高台に建つ寺院と鐘堂（園城寺、通称三井寺）、下方の赤い塔と舞台を備えたお堂（石山寺）などが確認でき、本作が琵琶湖を中心に八つの景勝地を描きたいわゆる近江八景図であることが分かります。

この作品を描いた茨木杉風（1898-1976）は、近江八幡市出身の日本画家です。墨の濃淡を活かした水墨画を得意とし、故郷・滋賀の風景を多く描きました。本作の風景も、杉風にとっては慣れ親しんだものであったことでしょう。写実的に描くことも出来たはずですが、あえて簡略化した筆使いをし、絵画的な面白さを伸びやかに追求しています。

本作は、4月28日～6月3日、滋賀県立琵琶湖博物館で開催される展覧会「近美×びわ博 描かれた湖国の生き物と風景」に出品予定です。

オペラ日和

● 圧倒的な規模で贈る《トスカ》

びわ湖ホール事業部

チーフ・プロデューサー 舘脇 昭

今年7月、びわ湖ホールは新国立劇場と提携してプッチーニの歌劇《トスカ》を上演します。今回の《トスカ》は、作品の神髄を伝統的な手法で描くことで知られるマダウ・ディアツが演出。19世紀のローマを模した荘厳重厚な舞台美術や衣裳がこれでもかと登場、四面舞台や大規模なセリを駆使し、出演者数も群を抜くなど、新国立劇場がこれまで上演してきた中でも屈指の規模を誇る舞台です。美しくダイナミックな展開、人々の心を惹きつけるプッチーニの甘美なメロディ、随所に散りばめられた宝石のように光輝くアリア等、これぞイタリア・オペラといった雰囲気には溢れています。

物語は1800年6月のローマ。揺れ動く政情の中、惹かれあうトスカ（歌姫）とカヴァラドッシ（画家）。ローマ中を恐怖に陥れているスカルピア（警視総監）の歪んだ欲望が愛し合う二人を引き裂きます。指揮は俊英ロレンツォ・ヴィオッティ、トスカ役には豊かな音楽性とカリスマ性を併せ持ったキャサリン・ネーグルスタッド、カヴァラドッシ役は力強いテノールとして躍進するホルヘ・デ・レオン、スカルピアにはスケール大きいバリトンのクラウディオ・スグ

ーラが出演。世界の主要劇場で活躍する素晴らしい歌手を集め圧倒的な規模で贈りします。

この《トスカ》が新国立劇場以外で上演されるのは初めてとなります。これまで新国立劇場でしか観ることが出来なかった公演を関西で見られる絶好の機会となりますので、どうぞお見逃しなく!!



● オペラの楽しみ方

入場料は高いか安いのか？

オペラでは、大規模な国内制作物で1〜2万円、海外の有名歌劇場引越公演ともなると最近安くはなってきたとは言え3〜4万円と決して簡単に支出できる額ではありません。ところが、目の前で繰り広げられる一期一会とも言える素晴らしい舞台上に接した時、オーケストラや歌手の生の音に心が震えた時、舞台を埋め尽くす出演者や舞台装置のすごさに心奪われた時、お支払いいただいた入場料だけのものは必ず感じていただけたらと思います。びわ湖ホールでは2018年度、8つのオペラを用意しています。ぜひ劇場にお出かけください。

《トスカ》

日時	7月21日(土)・22日(日) 両日15:00 開演
会場	びわ湖ホール大ホール
指揮	ロレンツォ・ヴィオッティ
演出	トスカ キャサリン・ネーグルスタッドほか
合唱	びわ湖ホール声楽アンサンブル、 新国立劇場合唱団
管弦楽	東京フィルハーモニー交響楽団
チケット	S席18,000円、A席15,000円、 B席13,000円、C席10,000円、 SS席・D席・E席は完売